

愛媛県支部

『県内中小企業診断士の「業務の現状」と「方向性模索」』

本調査は、個人的な見解で恐縮であるが「ふたつの疑問」から始まった。それは「中小企業診断士という資格は今後どうなるのか?」「中小企業診断協会の役割とは何か?」という単純な疑問である。恥ずかしながら筆者は本年6月より支部副支部長、事業委員長という職を仰せつかり約半年経験したが、この疑問を解決するに至っていない。また、同時期に本調査において「会員の皆様はどう感じているのか?」についてアンケートをお願いしたが、同じ思いの方やまったく異なる意見等、さまざまな意見をいただいた。

ただ報告書では、単に現状分析であり、その結論までは至っていない。その疑問は、会員皆様が積極的に参加していただき、意見を語って始めて進むと考えたからである。そこで報告書をお読みいただき「協会の仲間」としてのさまざまなご意見を感じていただきたいと思う。会員諸氏にとって中小企業診断士という資格を取得以来、協会との関わりは年1回の登録更新研修会への参加と理事職等の場合は、年数回の会合・研修会等への参加があると考える。しかし独立診断士、企業内診断士も資格取得後の道は異なるが、まずは自らが生活してゆくことの方が重要であることは当然である。その過程で独立診断士である筆者の場合、協会から生活できるほどの仕事や紹介の斡旋があるといことはなかったし、誰もそうではないだろうか。理事になって感じるのは、協会活動というのは“ボランティア活動”であるということである。また“名誉職か?”といえは現時点ではそうでもなさそうだ。勝手な解釈であるが20数年以上の伝統ある協会(支部)は、過去の先輩診断士が苦勞して設立された組織で、後続する会員が守っているというようなイメージなのかもしれない。

つまり、現在の協会は“シンボリック的位置づけ”と考えると合点がいきやすい。ただその“シンボル”が仮になくなると会員のデメリットとして、登録更新研修は県外の協会か民間業者に「自ら」が依頼する必要があるし、更新のための30ポイントの獲得を目指し「自ら」が手配する必要がある。また、登録関係等の各種手続きも本事務局にいままで当然のように委ねていた処理を「自ら」が行わなければならないという煩雑な作業が生まれる。そこで“本当に困るのは独立診断士というより企業内診断士ではないか”とも感じる。

ところで現在、協会理事の比率は独立診断士が圧倒的に多い。そうなれば当然に企業内診断士のことがほとんど議題にも上がらないのは至極当然であろう。本来協会員は企業内診断士の人数が圧倒的に多いが、業務上の制約もあってほとんどが独立診断士しか集まらない現状では、協会は独立診断士だけの組織という偏った存在になってしまう。こうした課題も含めて、今回は独立診断士と企業内診断士に分けてアンケートを行い、その個々の課題を抽出したかった。

「ふたつの疑問」から出発した本調査・研究は、単なるスタート地点に立つための“呼び水”であり、今後多くの議論を重ねないと前に進まない。つまり、多くの会員の皆様が意見を出し行動してくれてこそ、前に向いてゆくのは前述のとおりである。ただ、現状維持のままで特に大きな問題は起きないだろう。そこで今後「中小企業診断士資格の存続を危機と感じるか!」「協会存亡の危機か!」とを感じるのは協会員一人ひとりの内面にある。